《オール読物新人賞作品》

真夜中の少年

平　龍生

何しろ、のろのろしているのだ。
一階から八階まで四十五秒もかかる。身につい た忙しい心のためか、青野はのろのろしたエレベーターに乗ると苛々（いらいら）した。この市街地アパートに住みついてから三ヵ月になるが、最近になって、やっと馴（な）れた。
二メートル四方の鋼鉄の箱の中を青野は四角に沿って歩きながら空を昇るのだった。
ある日、一人でエレベーターを無心のまま巡っていると、エレベーター内に備えつけられている壁面の鏡に誰かの姿が写った。
自分の横顔のようでもあったし、後姿のようでもあった。何となく、薄汚い鏡であった。
じっと見つめたことはない。
自分の顔が年取って写りそうな気がした。
特に、真夜中に鏡と対面するのは薄気味悪かった。鏡の四隅は剥げていた。

一体、これまで何人の人々の表情を写し出して来たのだろうか。
何しろ、この市街地の公団アパートは建てられてから十数年 は経っていた。
古い鏡はふいっと人の姿かたちを写し出して、ふいっと消してしまう。
そんな気まぐれな記憶の遊びをこれまで何十回、何百回となく繰り返して来たのだ。
青野はおかしなことを考えた。
その内の一人や二人は、残像が、鏡の面に残っていてもいいのではないかと考えたのだ。
とつぜん、何かの拍子に、その残像が浮き出されることだってありはしないか。
だから、ある日、ふと翳った誰かの姿に青野は奇妙な興味を持った。
もちろん、はっきりとは見たわけではない。
そのように、青野が感じただけのことかも知れなかった。
四角い箱の中の巡りの世界で、その後も、二度ばかり、少年らしい翳（かげ）を見た。
青野にはそのように思えた。
不思議にいつも真夜中のエレベーターの中だった。ちょっとした気配とでも言うべきだろうか。暗示に翳った部分もないではなかった。
残像についての奇妙なもの思いも多分に作用していたのかも知れない。
ところが、ある日、薄汚い鏡は誰かの手で砕かれていた。まだ、破片がエレベーターの中には飛び散っていた。
いっときに、多数の人々の姿かたちが壊されてしまったかのような思いに、その時、青野は取り憑かれた。
残像たちが死んでいた。

青野は足元の痛々しいガラス片を見ていた。
低いエレベーターの駆動音がひゅーいと震えていた。ふと、青野は少年のことを思った。
青野はエレベーターの四囲の壁を見回した。
汚れ、剥げ落ちた青い塗料が壁には張りついていた。薄ぼんやりとしていた。
仄暗（ほの ぐら）い案内灯の明度が急に落ちたように感 じた。
何となく、自分自身の存在を示してくれていたエレベーターの鏡が不意になくなったことは、青野にとっては、余り気持ちのいいものではなかった。
エレベーターの中を巡る自分に似た少年のことが、やはり、気になっていた。
どちらかと云えば、青野は少年っぽい顔をしていた。童心だって持ち合わせていたのだ。
たった、四十五秒のことだったが、もう一人の自分が死んでしまったという感じは嫌なものだった。一人で、今は空間に浮いていた。この粉々のガラス片が音を立てて、風洞直下に落ちて行く時の冷たい響きが青野には分かった。
市街地アパートの一階から八階までの距離を二メートル四方の鋼鉄の箱が昇ったり、降りたりする。空の位置が帰り着くところだと思って青野は毎日同じことを繰り返していた。
今は昇っている。
誰の意志だろうと青野は考えてみた。
三角の押ボタンを押したら連動扉が開いた。
八階行きのボタンを押した。
鋼鉄の箱はのろりと身を揺すらせた。
やっぱり この俺の意志だなと青野は昇りつめる行為の 責任者を探り当てた。
わかり切ったことを反芻（はんすう）してい

る自分が少しばかり、嫌になった。
ぴったり、四十五秒だった。
エレベーターが八階に着いた。
扉が開いた。正確過ぎた。
コンクリートの踊り場に青野は降りた。
今夜は冷えた。
何かにつけて、この市街地アパートは截然（せつぜん）としたものを持っている。
見下ろすと、鉄鋭の隠段の手摺（てす）りがぐるぐると同円を描いている。
黄色い扉が部屋の数だけ、コンクリート通路の渡り廊下には並んでいた。
各室ごとの空気孔だって、扉の上に設置されている配電盤だった。
みんな同じ仕様だった。
そのせいだけではなく、とても、冷え冷えとしていた。四十五秒のあとは七秒だ。
八〇二号室の黄色い扉までの歩距離だ。
まるで同じ歩みだ。
青野は二回ほど回れ右をし、道草を喰ってから扉に手を掛けた。
バランスを崩したくなる日がある。
二秒、帰着が遅れてもいい。
八階の空の位置でのスキップだ。
音もなく開く奇妙な扉だ。
ここの空間は静まり返っている。
鍵を差し込むことをいつも青野は躊躇（ためら）う。誰かの心の中に冷たい手を突き立てるような嫌な感じだった。
一瞬だけ目をつむればいい。
すーっと開いた扉の向こうから、誰かが、お帰りなさいと声を出す。
ただいまと頭の中で答えて、青野は暗い部屋

に入る。電灯を灯す。
誰かがいるわけではない。
八階の空で一人ぼっちで浮いていることにはそれなりの怖さがあるのだ。
だから、ただいまと言う。
あのエレベーターの中の少年との見えない対話の時だってそうだ。
八階の空に昇って行くことの不安なこころが青野に独り言（ひとりごと）をこぼさせるのだろう。真夜中に、何となく目覚めているというのも、嫌なものだ。電気毛布にもぐりこんでも、いつもの癖で周囲が気になっていた。
空気が張り詰めてくる。
もうそろそろ、階下の女が帰って来る頃だと青野は考えた。住人たちの挙動が気になった。
コンクリートの渡り廊下に面して部屋が十室ある。真っ直ぐに伸びた八階の通路の一番奥の部屋に、ホステスらしい女が住んでいた。
これは、そのように、青野が考えていたことではあった。そんな筋書きに思えていたのだ。
もっとも、帰りが遅いというだけで青野は顔は見たわけではない。ホステスかどうかも疑わしい。丁度、青野が寝つく頃、ひゅーいと、エレベーターの始動音がする。
四十五秒の空中飛行だ。
がちゃりと、八階に昇り詰めてエレベーターは誰かを吐き出す。人の気配がして…たしかに、一番奥の八一〇号室に消えて行く…。
それにしても、いつも鍵の音が聞こえない。
鍵穴に鍵を差し込む時のあの怖さを女は知っているのだろうか。
時折りは、そっと扉を開け青野は顔を出してみるのだが、いつも女の姿は見えなかった。

八〇二号室の青野の部屋からはやや死角になる。そのせいもあったかも知れない。
一、二度、ホステスらしい女の姿を夕暮れ時に見たことはあった。
市街地アパートの前でタクシーを拾っている女にお目にかかったことがあったのだ。
もっとも、その女が真夜中にかえって来るものなのかどうかは確信はなかった。
きっと、そうだと、青野が決め込んでいただけのことだった。今日も、やっぱり帰って来たらしい。午前二時になっていた。
いつものように、足音を立てずに，八階の空の位置に戻ってきた。
静まり返った鉄筋コンクリートの空洞をひゅーいと音を立てて、今、女が昇っている。
あたりの空気が透明になっていくような緊張感を青野は覚えた。
青野の神経は冴えた空気のただ一点に向けられた。たしかに、八階の空に降り立った…。
ふっとその後の音がいつものように消えていた…。まさか、この真夜中にエレベーターが誰も乗せずせずに昇って来るはずがない。
誰も乗らないのに、エレベーターだけが昇って来るのだとしたら…。
青野はその憑かれた思いを打ち消した。
電気毛布にくるまって、青野はじっとしていた。この不思議な気配を一人で確かめようという気にはなれなかった。
見えないものが、見えてくるような気がした。壊れた鏡の破片が落ちて行く時の凄まじい音が、なぜか、青野の耳に響いた。
音が見えたとでもいうべきだろうか。
この真夜中だと小さな物音でも、鋭さをきら

めかせたまま無限に広がって行く…。
青野にはその痛い音の深さが分かった。
この夜も女の気配を聞き取ろうとして、青野は息を潜めたのだが、暗い空に浮かんだ八階のコンクリート道に、その女の足音はふいっ消えていた。たしかめようがないままに。
また、青野は寒さを感じた。
ひゅーい…。
と、いうエレベーターの音だけが、青野の耳には残っていた…。

2

エレベーターというのは逃れられない場になるとがある。青野はエレベーターの中で息を殺し合う感じが我慢ならなかった。
それが今日は三人が乗り合わせた。
まして、この、のろのろエレベーターだ。
しかも、青野を含めて、三人とも八階の住人だった。無言のまま嫌な思いで青野は降してくるエレベーターを待った。
見慣れぬ張り紙がしてあった真夜中のエレベーター強盗の手配書だった。
マンションや、アパートなどのエレベーターを狙った犯罪が多発している旨も記されていた。エレベーターが締まる寸前に、若い女が飛び込んできた。赤いオーバーを着ていた。
一人だけ，四階のボタンを押した。
四人乗るとエレベーターは満員になった。
走りこんだ女はまだ肩で息をしていた。
おしゃべりの交野女史のおかげで、少しばかり救われた。翻訳か何かの仕事をしているのだろう。青野が気に掛けている程度の話だったが

、時には、出版社の女の子が交野女史の室には訪ねて来ているようだった。
「女一人じゃエレベーターにも乗れないわね」
と、交野女史が言った。
青野はこの女性の顔を見返すのを止めた
ぶっきら棒なしゃべり口には不快感があった。浅黒い顔に度の強いメガネ、そんな印象だけを青野はその時、思い浮かべていた
川村夫人はずっと黙っていた。
結婚指輪を嵌めていたので、そういう身分なのだと、青野は思っていた。
夫である男の顔は見たことはない。
時折り、顔を合わせることはあったが、いつも、川村夫人は伏目勝ちにと通り過ぎた。
まじまじと顔を見たのは今日が始めてだった。肌の白さが目に入った。四十に少し手前の年合いだろうか、斜め後ろの位置から、青野は川村夫人の横顔を見ていた。白いうなじに長い鬢（びん）がほつれていた。青野の視線を感じたのか、川村夫人の後ろ姿はどことなく硬かった。
ともかく、四十五秒だ。
すぐさま、青野は話の続きを用意した。
黙って、他人同士が同じ場に突っ立っているなんて耐えられない。
「八〇一号室の女の人、たいへんでしょうね、ほら、いつも、帰りは真夜中でしょ？」
交野女史が青野のほうに向き直った。
「あら！あそこは空室じゃなかったかしら？ねえ、川村さん、お宅のお隣りは、空室でしたよね」
無遠慮に顔を覗き込まれて、川村夫人はとまどっていた。わずかに、頷いたように見えた。
どちらとも青野には判断しかねた。

若い女が四階で降りた。
ちらと、青野のほうを見たようだった。
エレベーターの扉がゆっくりと締まった。
「何しろ遅いわね。このエレベーター。強盗だってきっとうろたえるわよ。何てったって、駆け下りたほうがずっと早いんだから。先回りしてご用という手もあるわよ、ねぇ」
みんなに、同調を求めたようだったが、少々、けたたましいしゃべり口だったので、誰も返事はしなかった。
エレベーターの中の嫌な沈黙が続いた。
青野も川村夫人も、ただぎごちない笑いを口元に浮かべて時の過ぎるのを待った。
すとんと、エレベーターが失速した。
ゆっくりと、一度戻り、そして、四十五秒の時間切れの合図が告げられた。扉が開いた。
やっと、他人同士の共有時間が解かれた。
交野女史はさっさと一歩を踏み出していた。
「よっこいしょ」という掛け声と一緒に。
川村夫人は、一歩体を後ろに退き、青野に道を譲った。瞬間、二人は一歩が歩めず、お互い顔を見合った。
「どうぞ」
かすかに、川村夫人は笑ったようだった。
はにかみがみ看（み）てとれた。
青野は押し出されていた。
譲り合うこの行為の間合いの長さが苦痛だった。一礼して、一歩前に出た。
男と女がすれ違う時の何とはない余情のようなものが残った。一歩、踏み出したら、もう、川村夫人とは他人になっていた。少しばかり、風の強い夜だった。
明日から、出張で青野は徳島へ行くことにな

っていた。『教育図書のセールス』というタイトルである出版社の支局から講演を頼まれていた。下調べをしておかなければならなかった。
だが、気持ちが落ち着かなかった。
今夜は風が強いのか部屋の窓がいつまでも、がたがたと鳴った。青野は風のせいにして、原稿の整理を止めた。
時計の針を見た。十二時に近い時間だった。
何気なく、郵便受けのスチール製の箱を見た。外から、差し込む仕掛けになっており、いつも、新聞を引き出すのに苦労をする。馬鹿げた構造を持った備えつけの郵便受けだった。
その郵便受けの中扉が気のせいか、少しばかり、動いたようだった。
誰かが、室内を窺っているような気配を感じた。もうすぐ、真夜中だと青野は思った。
ふと、エレベーターの音を聞き取った気がした。エレベーターの駆動音がしていたのではない。ちらと、真夜中に帰って来る女のことを考えたからだった。
仕事に気をとられていて、あの女の帰りを聞き落としたのかも知れない。
だが、まだ、時間は十二時前であった。
いつからか、青野は真夜中に帰って来る女のことが気になっていた。ここ、一ヵ月ばかりのことだった。ともかく、真夜中になると、女のことが気になるのであった。
青野は立ち上がり、扉に向かって歩いた。
思い切って自室の扉を開けた。
外の渡り廊下をみやった。
誰もいなかった。それを確かめてから、渡り廊下に足音を忍ばせるようにし、出た。
几帳面（きちょうめん）な構造を持った公団

住宅の居室が、やはり、コンクリート道に沿って並んでいた。一つずつ、真鍮製の把（と）っ手がくっついていた。
コンクリートの壁で区切られた長方形の棲家の各室に、がっちりとした鋼鉄製の扉が組み込まれていた。
誰も、コンクリートの通路にはいなかった。
ふと、自分が立っている位置に青野はとまどいを持った。真夜中の散歩でもあるまいという思いも頭のどこかにあるようだった。
それで、自分の一日に楽しみの部分を加えた。バランスを崩したくなった。
余りにも、きっちりしている。
整然とした空間の持つ静けさに、この時、青野は言い知れぬ怖さのようなものを感じた。
いや、むしろ、その怖さの感覚に青野は惹（ひ）かれていた。
四十五秒プラス二秒の、バランスを崩す。
そんな心の遊びが今は欲しいと、青野は思った。誰かが、郵便受けの隙間から覗いていたと考えることのほうが楽しいのではないか。
何とはない怖さの気配も打つ消すことが出来る。青野は自分の部屋の扉のあたりを、今更のように改めて眺めた。
ゆっくりとした視線を送った。
誰かが、覗いていた？
だから、自分の部屋に備えつけられた郵便受けの隙間から青野も覗いた。
誰かとは、自分自身で、そして、その誰かとは、いつか見たような気がした鏡の中の少年であってもいい。そう考えることが楽しい。
それで、青野は膝を折って、郵便受けに顔を

近づけた。外から自分の部屋を見る。自分ではない自分が見えるかも知れないー。
どこか、錯綜している思いだが、青野には正気の部分はちゃんとあった。
奇妙なことに気がついた。
郵便受けの差し入れ口の下に、水蒸気の微粒が浮き出ていた。汗の粒に似ていた。
水の雫（しずく）が、つーっと下に流れた。
青野は手で拭った。
暖かい室内温度のせいだと思った。
そう言えば、室内に湯気を吹き上げたヤカンを残してきた。石油ストーブだって赤く燃えているはずだった。
外の冷気との温度差がもたらした現象なのだろう。青野は楽しさを発見していた。
郵便受けを外から押すと三ミリほどの隙間が出来た。額を押し付けると、二メートル幅ほどの視野を持った室内が見渡せた。
誰もいない自室が見えていた。
青野は一人だけで笑った。
誰もいなかったからだ。
何となく可笑（おか）しくなっていた。
今度は後ろを見た
見ている自分を誰かが見ているのではないかと思ったのだ。一人で、意味もなく笑っている自分の表情を誰にも見られたくはなかった。
ふと、奇妙な遊びのことが青野の脳裏にひらいた。個室におさまっている一人一人の澄まし顔に興味が沸いた。
一人になった時、人間というのは、どんな表情をしているのだろうか。この三ミリの隙間だ。その隙間に閉じ込められた人々の笑い顔や、憂い顔に、青野は関心を持った。

同じ造りの公団アパートだ。
どの部屋だって、ほぼ、三ミリの隙間越しの光景を共有しているはずだった。
青野は、八〇三号室の番号を見た。
隣りの交野女史の部屋は静まり返っていた。かちゃかちゃと、正確に文字を刻むタイプライターのキーを叩く音も、今夜は途絶えていた。
そっと外から、郵便受けの扉を押した。すっと動いた。明るい世界が青野の視野の内に入って来た。交野女史は、電気ごたつにおさまっていた。余り、いい図ではなかった。
食パンを手で千切るようにしながら、夜食のつもりか、パンのかけらを口に運んでいた。
青野は目を離した。嫌な感じを持った。
立ち上がっていた。通路の奥のほうを見た。川村夫人の白いうなじのことに思いが届いた。足音を忍ばせて歩いた。その部屋の前に立っていた。やはり、周囲が気になっていた。
ひとわたり、目を配ってからコンクリートの通路にしゃがみ込んだ。
三ミリの隙間に目を当てた。
真っ暗闇だった。人の話し声も聞こえない。この家の者はもうについたのだろうか。
青野はふと寒さを感じた。
この部屋の中には風が吹き入っているように思われた。中扉を開いた指先だけが冷えていくのだ。風は、青野の座っている方角に向けて吹いていた。こんな夜中に、どうして、窓がぽっかりと開いているのだろう。
暗い部屋の中に突っ立って誰かが、暗い空を見ているのだろうか。それとも、窓を開けたままに家人は出掛けて留守なのか。
何も見えなかった。

青野は不思議な思いに打たれて目を離した。
隣りの八一〇号室を見た。
空室なのだろうか。とても、覗いて見る気にはなれなかった。と、その時、エレベーターの始動音がした。はっとして、青野はその場から離れた。変な期待感があった。
真夜中に帰って来る女の顔を見ることが出来るかも知れない。が、エレベーターは四階で止まった。女の足音がした。
ハイヒールのかかとの細くて高い音が響いていた。青野は昂奮を覚えた。
足が階下に向いていた。
三段跳びに階段を降りて四階を目指した。
自分の靴音に気付いて途中から靴下だけになっていた。四階にあわてて立っていた。
がちゃんと、中から錠を下ろす音がした。
その音で部屋の番号が分かった。
四〇二号室、青野の部屋の真っ直下。両手に靴をぶら下げた恰好のまま青野は近づいた。
郵便受けの中扉をそっと開けた。
ぱっと、蛍光灯が点いたところだった。
横顔が見えた。
エレベーターに飛び込んで来たあの若い女だった。後姿だけが見えていた。
三ミリの世界が閉ざされていた。
何をしているのか、いつまでも、後姿だけが立っていた。だが、青野には次の場面が想像出来た。黒い影がこちらを向いた。石油ストーブが赤く燃え上がった。
テレビを点けたのか歌謡曲が不意に湧き起こった。音量はそれほどなかった。
女はストーブに手をかざしていた。
しばらくしてから、手が暖まったのか、ぺた

んとじゅうたんの上に座った。
歌謡曲の一節を口ずさんでいた。
横顔が揺れた。口を突き出していた。
テレビと話をしていたテレビに出演している歌手気取りだった。青野は郵便受けの隙間から目を離した。何か物音がした。
再び、隙間に顔を近づけた。
洋服ダンスを開けて上着をしまい込んだ。
また、座り込んだ。白いセーターの胸が揺れた。何か呟いた。
恋人にでも話しかけているみたいだった。
それからこちらを向いて舌を出した。
首をすくめてみせた。
青野は、驚いて、隙間から顔を離しかけた。どうやら、独り芝居のようだった。
それから、長い間、女は寝る前の身だしなみに余念がなかった。その手順のわずらわしさに、青野はうんざりした。
自分の部屋に戻ろうと思った．馬鹿馬鹿しい自分の姿を見ているようだった。
これまでの時間がむだのように思えた。
青野の気持ちの中には、覗き見ることの俗な部分もあった。この秘密の遊びは男の欲望をくすぐってもいた。退屈さを感じて青野はコンクリートの通路に立っていた。
あくまで、待とうと思った。
ふと、奇妙な部分に気が付いた。
四〇二号室の郵便受けの差し入れ口の下に、あの水蒸気の微粒が浮いていた。
たしか覗いた時にはなかったはずだった。
だとしたら、覗くという行為と関係があるのだろうか。嫌なもの思いが走った。
まさか…青野は考え直した。

部屋の状況は同じではないか。
赤いストーブだって燃えているー。
この、青野の疑問は、直ぐ様、消えた。
青野が立っているのはエレベーターの踊り場が見える位置だった。
一階の標示灯が点いたままエレベーターは止まっていた。女が、立ち上がった気配がした。
今度、だめなら止そうと青野は考え、扉に近づいた。女はセーターを脱ぎ、両手を後ろにやった。ブラジャーが外れた。
白い乳房がちらっと見えた。
その時、ひゅーいとエレベーターの始動音がした。誰かが、四階に降りるのかも知れない。
いや、八階の空へ昇って行くのだろうか。
あわてて、青野は身を退いた。
目は自然にエレベーターの標示灯の行方を追っていた。二階を通過するところだった。
青野はあの真夜中のエレベーターのことを思った。今なら、飛び出して行って、四階の開閉ボタンを押すことだって出来る。
が、なぜか、その勇気は青野にはなかった。
覗き見をしていた後ろめたさもあったが、音もなく帰って来る女らしい誰かには、やはり会いたくなかった。
ゆっくりと、エレベーターは四階に上がって来た。連動扉の向こうに青野の知らない女が浮かんでいるー不意に四階の扉が開くかも知れない。もしかしたら、女ではないのでは…。
だとしたら、あの鏡に写った、いつかの少年なのだろうか。それ以上のことは、青野は考えられなかった。
急に、怖くなっていた。
通過しょうとしている三階の階段に逃げてい

た。階段を降りた。
振り返ると、ちょうど、四階の標示灯に明かりが点いたところだった。
どこかで、青野はこのエレベーターに乗った誰かと擦れ違っていた。
そのまま、エレベーターは音調を変えずに、上に昇って行った。まさしく、八階に向かっていた。目は、行き先標示板に吸い寄せられていた。あと、何秒のことか。四十何秒目かの長い時が空に浮いていた。
減速装置のゆるやかな音がした。
七階を過ぎていた。
八階の空の一点に停止した。開閉扉が開く音がした。締まった。見えるはずはなかったが、青野は三階の位置から八階を見上げた。
誰かの足音を聞こうとして、耳を澄ませたのに、ふっと、足音は消えていた。
何も聞こえなかった。
青野は血の気が引いて行くのを感じた。
階段を上がるのが怖かったが、八〇二号室に戻ろうと思った。
が、そのためにエレベーターのボタンを押す気には、とてものことなれなかった。
エレベーターは八階の空に浮いたまま息を潜めていた。青野は行き場を失った。
寒い風がエレベーターの風洞の中を走り抜けて行ったような気がした。
独り、身震いした。
青野の足は階下に向かっていた。
自分の足音が真夜中のドームには跳ね返った。その足音の大きさに青野は追い駈けられていた。足音を忍ばせ、歩いているのに、足音は跳ね返った。一階に着いた。

一階と八階は遠い距離だ。
遠い空の上だった。
このおかしな安心感のゆえに、青野は一階に降り立ち、そして、一階の押しボタンを押した。
ひゅーいという始動音が空の上から届いた。
そう決めたわけではない。
青野はエレベーターを待っている癖に、衝動的に階段を駈け上がっていた。
姿の見えない誰かをエレベーターの中に閉じ込めたつもりだった。
標示板は見なかった。
すれ違う瞬間が怖かった。
怖さに憑かれて、青野はちらと標示板を見た。五階のランプが点いていた。
青野はちょうど六階の階段を駆け上がろうとしていたところだった。
すでに、擦れ違っていた。変に元気が出た。
青野は一気に八階まで駈け上がった。
部屋の中に飛び込んだ。
がちゃりと、錠を下ろした。
そのまま、頭から布団をかぶった。
青野は喘いでいた。吐く息が荒かった。
電気を消そうとしてスイッチに手をやった。
いつもの習慣だった。が、手は止まった。
奇妙な思いがふっと湧いた。
エレベーターを出た誰かが、八階のコンクリートの通路には立っていたのではないか…気付かずに来てしまった。見ずに通り過ぎたことが怖さを増幅させた。
八階の空の上に、エレベータは今は止まっているはずだった。そう思うと、青野の体に小刻みな震えが伝えられた。
なお、怖さへの思いが募ったー。

寝不足のまま、その日の朝、青野は徳島行きの直行便に乗るために家を出た。
それで朝の六時半に、公団アパートのエレベーターに乗った。途中、いらぬことに気が行った。エレベーターが、その途次、四階で止まった。乗って来たのは、昨夜の女だった。
やはり、赤いオーバーを着ていた。青野は他人でないような気がして口をきいた。
「ずいぶん、早いんですね」
昨夜の帰りが遅かったのにという意味も少しはあった。女は腫れぼったい目をしていた。
「羽田まで人を送りに行くんです」
機嫌が悪いのか、素っ気ない言い方だった。
時計を気にしていた。
青野は自分も羽田まで行くのだと告げた。
エレベーターが一階に止まって、二人が駆け出そうとした時、彼らは出会い頭（がしら）に、新聞配達の少年とぶつかった。
赤い頬にあどけなさが看（み）て取れた。
どちらからともなく詫び、青野と女は少年と擦れ違った。二人は小走りに表に飛び出していた。公団 アパートの直ぐ前に幹線道路が走っていた。青野がタクシーを拾った。青野が誘い、二人はタクシーに同乗することになった。
「ああ助かったわ。ぎりぎりよ。高いタクシー代が要ると思って心を痛めていたの」
女は笹本みつ子と名乗った。
笹本という苗字は表札を見て知っていたが、みつ子という名は女の口から聞いて初めて知っ

た。みつ子は聞きもしないのに、自分の身の上をべらべらとしゃべった。
二交代制でウエイトレスをしているらしい。「今日は遅番だからゆっくり眠れたのに。姉さん夫婦が転勤でアメリカに行くの。わたしだって、ひょっとしたら、アメリカに行けるかも知れないじゃない。まあ、少しはお付き合いもしておかないとね」
あとは、いたずらっぽく笑った。
タクシーに乗っている時間は二十分ばかりであったが、どれもとりとめのない話ばかりであった。みつ子が大きな身振りで話をする度に、あの白い乳房を包んだセーターの胸が揺れた。
何となく視線を向けたまま、青野はみつ子の話にだけ耳を傾けていた。
結局、三日後の土曜日に帰って来ることと、自室の八〇二号の部屋のナンバー、それに、徳島から土産物を買って来る約束話だけが青野の口から出た。
みつ子はタクシーを降り、国際線のロビーの方に走った。青野は一番外れのローカル線のゲートに向かった。
だが、それとなく、青野は楽しくなっていた。みつ子の、あの白い乳房のかたちが頭の中にあったわけではなかったが、ちょっとした縁のようなものを面白く感じたのだ。
飛行機は定刻通りに飛び立った。
フレンドシップ機は気流のせいか、大きく揺れた。決して、愉快な旅ではなかった。
みつ子のことが頭になかったら、もっと、不快な旅だったろう。それでも、淡路島上空を通過した時には、景色のよさに見とれた。
足の裏のようなかたちをした地形に見えた。

湖が島のあちこちに点在していてちょっと珍しかった。徳島に着いてからのことは、別段変わったこともなかった。
見知らぬ人々に会ったせいで、いつもより、気疲れした程度だった。
この間、エレベーターのことはまるで思い出さなかった。昨日の夜はアルコール分のせいで、ぐっすりと眠ってしまった。
それに、どこに行ってもエレベーターにはお目に掛からなかった。会場の小学校を三校ほど回ったが、どこも平屋の木造校舎だった。
が、三日目の夜、青野は否応なしに、あの真夜中のエレベーターのことを思い知らされた。
それも、唐突な方法でだった。
夕刻の便で徳島を発ち、大阪で乗り継いで、青野は東京に向かった。
スチュワーデスが夕刊を配っていた。
手にした夕刊紙に、何気なく目を通した新聞記事の片隅にエレベーターにまつわる事件が報じられていたのだ。
しかも、青野が今から、帰ろうとしている市街地のあの公団アパートでの出来事だった。
エレベーターが故障していたらしい。
真っ暗闇の空洞の底へ女が落ちていた。
連動扉が開き、一歩を踏み出したら、そこが奈落の底だったのだ。
もちろん、詳しいことは分からなかった。
何階で起きた事件なのか。
それに、女の身元は不明となっていた。
誰かの部屋に訪ねて来たらしいと言う。
エレベーターの中での犯罪が激発しており、その線からの捜査も行われている旨の記事も載せられていた。

飛行機はエアーポケットに落ちて大きく下降した。青野は初めて新聞記事から目を離した。
飛行機は落ち続けた。
ここは八階の空ではなく、高度八千メートルの夜空の上だったが、気味の悪さは同じことだった。不安定な状態のままで青野は空の上に浮いていた。
八階の自室に帰ることには、青野自身にはとまどいがあった。わざわざ、薄気味の悪い場所に戻ることはないのにと思った。
が、飛行機は定刻より三十分遅れたが、羽田空港に帰着していた。
すっかり、暗くなっていた。
みつ子への土産物を手にタクシーに乗った。
行き先はやっぱり八階の空の上だった。
二十分ほどで、市街地アパートに着いた。
エレベーターは止まっていた。
故障の張り紙がしてあった。
とことこと、青野は階段を上がった。
いやでも、みつ子の居室のある四階は通ることになる。階段を歩いているのは青野だけだった。楽しみ癖がついたのか、青野は郵便受けの覗き穴からやはり室内を窺った。
少し、怯（おび）えた顔で、みつ子は扉の方に顔を向けていた。青野は扉を叩いた。
叩き方が陰険だったのか、みつ子は直ぐには応答しなかった。青野は名を告げた。
臆病そうに扉が開いた。
中から、ノブを握り締めたままみつ子が青白い顔をのぞかせた。青野の顔を見て、安心したのか、やっとみつ子は笑みを浮かべた。
が、直ぐに、みつ子は真顔になった。
「ね、知っているの？」

聞き取れないほどの小さな声で、みつ子が言った。
「あー、話が話だけに、怖いのか？」
青野は努めてやさしく応じた。
「ねえー、わたし、今から友達のところに行こうと思っていたの。あなたの部屋に行っちゃいけない？」
みつ子は、ほんとうに怖そうだった。
落ちたのは八階からかも知れないよと言いかけて、青野は止めた。
みつ子は、男と女のことを案ずるよりも、怖さから逃れることのほうに気持ちが先走っているみたいだった。
結局、タクシーに相乗りした時と同じように、二人は連れ立って八階の空に向かった。
だが、何となく、気が咎（とが）めて、青野は自分の部屋に入るなり、みつ子に言った。
「どうも自信がないよ。男と女同士だものな」
みつ子の白い乳房のことがちらと脳裏を掠（かす）めた。だから、青野のしゃべり方はぎこちなかった。みつ子は、そんな青野の緊張感とは無縁の台詞を吐いた。
「抱かれているほうがいいわ。だって、何か怖いのよ。わたしね。変な声を聞いちゃったの。何日か、前の日のこと、それも真夜中よ。何時かは気にしていなかったけど、エレベーターがすーと一階から上に上がって来たの。四階を通り過ぎる時、エレベーターの中から聞こえたのよ。わたし、一階の自動販売機までたばこを買いに行こうと思ったの。今から思えばぞーとするわ。何だか、歌声みたいなの。体中がすーと冷えたわ。わたしね。地下の管理人室にいるお爺さんにそのことを話したの。それがまた変なの

よ。ほんとよ。お爺さんが真っ青になったの。その話は誰にも話さないでくれって。何かありそうよ。あー、怖い。それに、今日の話だけど、エレベーターは八階に止まったままで動かなかった。もしかしら、事故に遭ったとかいうあの女の人は八階から地下に落ちたのかも知れないわ。さっき、たばこを買って、階段を上がって来た時にもエレベーターは八階に止まっていたわ。ずっと、そのままよ。ねえ、そう、八階よ！八階から、やっぱり、女の人、落ちたのかしら？」

ベッドの端に座ってみつ子は目を大きく見開いていた。

青野は悪い冗談をみつ子にぶつけた。

「あのエレベーターは因縁付きなのさ。何か、真夜中向きの筋書きが仕組まれているって感じだな。エレベーターの底は深いんだ。真夜中の墓場としてはお膳立てが揃っているよ。午前二時頃という時間は幽霊だっていちばん出やすいそうだ。何かの本で読んだことがあるよ。例えばだ。このアパートのエレベーターがデッド・ゾーンでさ。天国に通じているたった一つの道だとしたらどうだろう。いわくつきのエレベーターはいつも死霊たちで満員だ。なかには間の抜けた唄を歌う奴だっているさ。そうそう、あのあどけない顔をした新聞配達の少年だって乗っているかも知れないよ。いや、エレベーターボーイをやっているのかな」

間を持たせようと思って青野は饒舌（じょうぜつ）になったが、余計に、みつ子を怖がらせてしまったようだった。

みつ子は目をつり上げていた。

何も言わなかった。

「おどかさないで。エレベーターに乗れなくなるわ」
二人は気まずくなり、黙りこくった。
いつか、見たような気がした鏡の中の少年のことを、青野は考えた。
少年へとちらと思いが走ったために、青野は、つい、みつ子に対してまで、ありもしない少年のことを口にしてしまったようだった。
「あー、ともかく、ぼくは疲れたよ」
青野はベッドの上にあお向けに倒れた。
壁際に接してある小さなベッドなので、やっと、一人分のスペースだけが確保された。
「だめよ。今から寝ちゃ、夜が長いわ」
みつ子はベッド際に置かれた一人掛けの椅子に座ったまま身を硬くしていた。
「このまま、夜を過ごすにしても、まずは、お互い、寝る場所を用意しなくちゃ」
「いいわよ。わたし、一緒のベッドでも平気よ。抱き合っているほうがいいって、この部屋に来る前に、わたし、言ったでしょ」
「抱き合っていれば、夜は短く感じるさ」
ベッドに寝たまま、青野が手を差し伸べた。
みつ子は緊張した面持ちになったが、青野の手に導かれると、もつれ込むようにしベッドに入り、体を擦り寄せて来た。怖さを忘れようとするのか、ひたむきな感じで身を投げていた。
もつれたまま二人は唇を合わせた。
電灯の明かりが、裸体に絡みつく。
二人の細長い影が壁面で揺らいだ。
夢中で唇を吸い合う。青野は目の上の蛍光灯のスイッチを消そうと、手を伸ばした。
唇を離した時、みつ子が短く叫んだ。
「消さないで！」

みつ子は体を捩（よじ）った。
暗さが怖いのだろうか。
青野はスイッチに手を伸ばすのを止め、明るい部屋のままにしておいた。
みつ子の白い乳房が青野の手の中にあった。
硬さがまだ残っていた。
白い首のあたりが喘ぎにつれて鮮紅色に染まった。二人のもつれ合いは、そこそこ、体をつないだ程度で、終わった。
挿入だけの行為で、青野は早々に果てた。
みつ子は毛布に顔を埋め、青野に手を握られたまま眠った。そばに、生身の人間がいるというだけで、みつ子は心が安らぐようだった。
それとも、体をつなぎ合った男と女の余情のせいなのか。青野はみつ子の暖かな体温に心地よさを感じながら、みつ子と一夜を共にした。
明かりは消さずに眠った。
今夜は、エレベーターは、八階の空の上に止まったままだと、青野は考えた。
ひゅーいと鳴る駆動音も、今夜は停止することになるようだった―。
たしかに、この夜は、エレベーターは休止していたようだった。青野は眠りに落ちた。
眠りに就きながら色々なことを考えた。
夕刻になると、青野は自分の部屋に向かって空を昇る。これまでの日々の過ごし方のことに思いが行った。在室している間にも何回もエレベーターは上下降を繰り返している。
わずらわしい音になることもあった。
まるで聞こえないこともあった。
目覚し時計の秒を刻む音にちょっと似ていた。秒は刻み続けていて何も変わりはないのに、目覚し時計は、意識の中で音を立てたり、消し

たりすることがある。
だから、エレベーターは、もしかしたら、この夜、動いたのかも知れなかった。
だが、青野はまどろみの中にあったのか、エレベーターの音は聞かなかった。
怖さをなくすための暖かい部屋だった。
瞼の裏に、蛍光灯の白光が入り込み、ちくちくと瞼を刺していた。
それで、青野は深い眠りには就けずにいた。
青野は夢を見ていた。
半ば、現実感を伴った夢のようだった。
それが、エレベーターの中なのかどうかも青野には分からなかった。
夢の中に、どこか、醒めた部分があった。
エレベーターの中だろうかと、疑いの思いを投げている、もう一人の自分がいた。
その思いが、どこでどうつながったのかは、青野には判断がつかなかった。
あどけない顔をした少年が自室の扉の外に立っていた。どうやら、扉は半開状態にあるらしい。もの淋しそうな表情にも見えた。
どこか、エレベーターの鏡に写った少年と似ているような気がした。
笑うともなく笑うと少年はハミングをし、何やら、唄を歌った。
声を掛けようとするのだが、なぜか、声は届かない。青野は扉の外に居て、少年は部屋の中にいるのか？その判断もつかぬままの二人の位置関係だった。
もどかしい思いの刻（とき）だけが過ぎて行く。明る過ぎるのだろうか。少年は翳りの部分へ顔をそむけようとしていた。
明かりのせいか、それとも、青野の視線が少

年には痛いのかも知れなかった。
ふと、目を逸（そ）らせた。急に、少年の顔が冷えていた。白黒の輪郭に彩られていた。
何となく、周囲には青い光景が広がっていたのに、少年の姿かたちだけが、ふーと浮き上がっていた。まばゆさを思わせる白光が少年の輪郭を異様なものにしていた。
青野は少年に向かって何かを叫んだ。
自分で自分を見ている？
そんな説明のつかない状況の中でのことだった。少年の顔が自分の顔と重なって見えた。
いや、一つになっていた。
見ていたのは自分で、見られていたのも自分だった。すべて夢の中でのことだった。
「違う、違う」
と、自分に言い聞かせている自分がいて、これは夢なのだと、おのれに擬せられた誰かが、自分に語り掛けていた。
と、その時、青野の体から白い光が抜けて行った。寒さの感覚がやって来て、身も心も、そして手足までが冷え冷えとし始めた。
エレベーターの風洞の中を通り過ぎる寒い風が、舞いながら、青野の全身を弄んでいた。
「うーっ、うっ」
と、青野はうなされて声を上げた。
助けを求めていた。
みつ子が青野の胸を揺すっていた。
白光が青野の瞼に突き刺さった。
「起きて！嫌よ！ねえ、起きて！」
みつ子の上ずった声が聞こえた。
夢の世界から青野は解き放たれていた。
「ね、怖い！エレベーターが…」
あとは言わなかった。

みつ子はいつの間に起き出したのか、ちゃんと着衣をつけていた。そのままの恰好で、ずっと、座っていたのだろうか　青野もベッドの上で上半身を起こしていた。
青野にはエレーベターの駆動音が聞こえたような気がした…。

4

この市街地アパートは終戦後間もない頃に建てられたらしい。コンクリートの壁は汚れていたし、エレベーターの扉だって、小さな傷があちこちについていた。
ほぼ、二十年近くの間に、入れ替わり、立ち替わりして、たくさんの人々が、この住空間には移り住んでいた。
今、青野の目の前には、日頃、見たこともないアパートの住人たちが座っていた。住宅公団主催の臨時集会が、この日、催された。
この小さなアパートに、こんなに多くの人間が入り込んでいたのかという驚きのほうが強かった。六十人ばかりもいただろうか。
個々の取調べは一応済んでいたが、今日は二回目の調べに、警察の係官も来ていた。
エレベーターにまつわる殺人事件というふうに、推理を楽しんでいるのだろうか。
だが、住宅公団の役人の話の方は、妙な事柄にと向けられていた。
警察の係官は早々に引き揚げた。
住宅公団の役人が席を構えていた。
まるで、耳に水の身勝手な話だった。
管理人の本田老人が住人たちに、コピーされた書類を配った。

趣旨の説明を役人が始めた。
「とつぜんのことで申し訳ないのですが、皆様方の住んでおられるこの公団アパートは、実は、ここにおられる本田さんの土地をこれまでお借りしていたわけなんですが、賃貸契約期限が今年の末になっておりまして、皆様方に住居の明渡しをお願いするということになりました」
初めて、一堂に会した住人たちは、口々に不満をもらした。誰もが初めて聞く話だった。
「とつぜん、馬鹿なことを言うな」
「誰も、そんな話、聞いてはいなかったぞ」
「わたしたちは、この後、どうなるんです？」
場内は騒然としていた。
「子供たちの学校のことだってあるんですよ。おっしゃっていることが矛盾しています」
世帯向け住宅に入っている中年女が言った。
公団の役人は本田老人のほうを窺った。
人々の目も本田老人に集まった。だが、本田老人は無言のまま下を向いていた。
「えー、これまでは当公団は本田さんのご好意に甘えていたというのが実情でありまして、十年目にも話はあったのでありますが、お願いして十七年の契約を結んだわけであります。いずれにしましてもこれは公団の責任 でありますから、皆様方には代わりの住宅を、ご満足頂けるよう用意致すことになっており ます」
また、非難のことばが役人に向けて飛んだ。
青野は本田老人を見ていた。
何か、もの悲しそうな顔をしていた。
「まさか、今回の事件と関係があるのではないだろうな」
若い男が意味のない質問をした。
本田老人の頬がぴくりと動いた。

青野は本田老人をじっと見ていようと思った。が、その時、説明者側の場に一人の男が歩みより、住人たちに向かい声を荒げた。
「住民同士が結束しなければだめです。公団側の理由だけで一方的に押し切られちゃ、不利な条件を押し付けられるだけだ。被害者同盟を作りましょう。住民代表というかたちでもけっこう！参加して頂ける方は前に出てください！」
もの慣れた男の煽り声に、二、三人の男が前に出た。青野は本田老人を見た。
しょんぼりとしているように青野には見えた。なおのこと、青野は本田老人に興味を持った。わが事のように、事態の進展に、本田老人は反応ぶりを示していた。
みつ子のしゃべったことばにも、何か関係があるように思えた。
それで、青野も男たちに混じり一歩前に出た。
この立ち退き問題と今度の事件は、やはり、何らかの意味で連なっているのだろうか。
少年と無人のエレベーター？
この謎めいた話にも、本田老人は、何か秘めた事情を持ち合わせているのだろうか？
あくまでも、それは、青野の直感というべきものだった。ともかくも、この立ち退き問題に首を突っ込んでみよう。青野はそう心に決めた。住人たちの顔をひとわたり見回した。
知った顔は少なかった。わずらわしさを感じたが、何か、気がかりで、ついつい、青野は問題処理の側に回ってしまった。
居ないのは分かっていたが、みつ子を探した。やはり、この場にはみつ子は居なかった。
日曜日だったが、今日は出番で、みつ子は勤めに出ているようだった。

寝不足な人々の顔が並んでいた。
青野はふーとため息を吐いた。他人ばかりの顔から、ひとまず、視線を逸らせた。
その夜、みつ子は青野の部屋にはやって来なかった。なすこともなく、青野は八〇二号室の空でぼんやりとしていた。
読みかけの長編小説に目を通したが、まるで、頭に入らなかった。
乱暴に本を投げ出した。
会う気があるなら、集会の是非のこともあることだし、顔出しぐらいはするはずだと、青野はみつ子のことを考えていた。
一人で、眠れるはずはないと、少しばかり、青野はたかをくくっている分もあった。
男の欲情とやらで、みつ子の白い乳房への思いも少しばかり持った。一度抱き合った仲、この部屋に、みつ子はやって来るものと、青野は一人勝手に決め込んでいた。
集会の時に耳にした話に、思いが飛んだ。
新しい情報を得ていた。
少年自身の実在話に頭が行った。
非現実の現実図を思い知らされた。
今日の会合の時、青野は嫌なことを、青野は聞かされた。立ち退き反対同盟に参加している五十年配の男がおかしなことを口にした。
「本田さんというのはまるでただのような値段で土地を貸していたらしいですな。何しろ、ずっと昔のことですからな。むしろ、公団のほうが気の毒がっているぐらいでね。ところが、今度の事件で決心したらしい。嫌なことを思い出をしたのでしょうな。もう、知っているのは数人だけですがねぇ。六、七年前に、やはり、同じような事故があったのですよ」

その男の文句は、青野を驚かせるに充分だった。事の仔細話を男が続けた。
「何でも、本田さんのところに来ていた少年でね。半年近くもいたかな。まあ、そのへんの事情はよくは知りませんがね。その子がね。あなた、修理中のエレベーターの落とし穴に落ちましてね。可哀そうに頭を打って死んだんですな。エレベーターの好きな子だった。いつも、歌か何か歌っていましてね。ほら、密室だから、マイクを通しているような気分になれるのでしょうな。小学校に上がるか上がらないかくらいの子だった。わたしもすっかり忘れていたんですがね。今度の事件でまた思い出す羽目になったんですよ」
男は遠くを見る目つきになった。
見えないものを、青野はそれとなく見ていたのだ。だが、男の語った忌まわしい過去の思い出話は、見えなかったはずのものを、見えるようにしていた。
少し、符牒（ふちょう）が合い過ぎていた。
なぜだか、すっきりしない思いを青野は持った。男の知ったかぶりの語り口のことが許せない気がした。青野は真夜中のエレベーターを、自らの世界にそっと浮かべて、あるいは、一人で、楽しんでいたのではないだろうか。
そう、考えたほうが、自分の倦んだ日常性に、ちょっとした刺激だって加えることが出来たのだ。それなりの怖さの感情ももちろんあった。だが、自分だけの想像領域の中で、青野は緊張感に似た思いも持てた。
その緊張した時間というものは、八階の空の位置では、あるいは貴重な時間なのかも知れなかった。

四十五秒という限られた時間だけではいかにも退屈してしまう。
そのために、ただ、空へ昇るなんていうのは、余りにも空しくはないか。
心ならずもという言い方がほんとうの気持ちだったかも知れない。
心ならずもだ。怖さを楽しむことで、ここ数十日の夜を青野は所有して来たのだった。
もっとも、この怖さの遊びには、青野の強がりの部分もないではなかった。
事実、青野は真夜中になると怯えてもいたのだから…。だが、男が告げた過去の物語りは、余りにも具体的なもので、エレベータが好きだった少年の死を、ただの古（ふ）りた話として片付けてしまっていた。
一人、青野は少年の死に思いを馳（は）せた。ぜんぜん、怖くないというのではなかった。むしろ、青野が少年を理解しょうと努めていたというべきだろうか。
が、そう、考えると、不思議な一体感が湧いて来て、少しばかり、怖さの感情が遠のいた。
ふと、現実的な事柄に、青野の思いは動いた。みつ子のことが気になった。
青野はジャンバーを引っ掛けて部屋の外に出た。エレベーターは動かず、一階で停止していた。今夜は標示灯も消えていた。
四階まで徒歩で階段を降りた。
いきなり、扉を叩くのは気が引けた。
やはり、青野は三ミリの秘密の覗き穴から中を窺った。みつ子の声がした。
誰か男が来ていた。青野の心は不用意だった。見てはいけないものを見てしまった。
いや、青野には見えないはずのことなのに、

すべてが晒（さら）け出されていたのだった。カーテンは引かれているのに、その場の状況は直ぐに判断出来た。
みつ子の笑い声が喘ぎに変わっていた。
あの白い乳房が、青野の知らない男の手で揉みしだかれているかのようだった。
汚されているような気もした。
居たたまれず、青野はその場から離れた。覗き穴の世界は余りにも現実味を帯び過ぎていた。その具体性が青野の心を傷つけた。
憎しみの情が湧いた。
何も見なければ、みつ子に会った時、やさしく笑えたかも知れない。素知らぬ顔でやって来れば、新しい気持ちでみつ子を抱くこともあったのではないかとも考えてみた。
鍵穴に鍵を差しこむ時の、あの冷えた感情が、青野には痛いように分かった…。
それにしても、今夜の怖ろしさがすべて無くなったわけではない。
夜の空に浮かぶ誰かの遊びだ。恐ろしい思いの上に、今夜は苦しさの思いも重なっていた。
みつ子のふしだらさを責めることに青野の思いは向けられた。一夜の情交とは言え、青野にとっては生々しい感触となっていた。
眩（まばゆ）い裸身だった。
空に浮いた位置だってまるで同じだった。
備え付けのベッドの構造だってまったく同じなのだ。四階と八階という高さだけが違うだけのことだった。
同じ姿勢で抱かれているみつ子の裸身が、青野の視野の内に迫った。
が、かたわらには、昨夜のみつ子はいなかった。怖さを忘れるために、みつ子は他の男を自

室に引き入れたのだろうか。そう言えば、昨夜の青野とみつ子は怖さをたしかめ合うために、ただ、抱き合ったのかも知れなかった。
結局のところ、青野は苦い思いをかみ締めていた。よくは寝つかれなかった。
コンクリートの通路にさまよい出た。
真夜中の散歩に一歩を踏み出していた。
まるで夢遊病者のように…。
エレベーターはスイッチを切られたままだった。半ば怖れ、半ば期待していた真夜中の空中飛行はどこかで絶たれていた。
さまよい出ても、心の痛さは消えなかった。
みぞおちのあたりがきりりと痛んだ。
怖さのほうがまだいい。
緊張感に充ちた怖さのほうが救われた。
青野はひゅーいとエレベーターが音を立てて始動することを願った。
少年のあどけない遊びを待ち望んだ。
早く、八階の空にと昇って来て欲しい。
だが、押し黙ったままエレベーターは一階に捨て置かれていた。じっと、瞼を閉じて、青野は八階のコンクリート通路の上に立っていた。
急に、周囲が崩れればいい。
気がついたら、自分の体だけが空中に浮いているーもう、現世とはお別れだ。
みつ子もいない暗い闇。そして、一つ、一つ、区切られた同じ造りの居室もみんな無い。
落ちて行くのか、そのまま昇って行くのか。
苦しさがすーと消えて行く…。
ふと、青野の心に、現実感が戻った。
その時、かすかな物音を聞いた。
青野の心は研ぎ澄まされた。各階段口に作られている水洗場のコンクリート槽の陰に、青野

は反射的に身を隠した。
たしかに、上に向かって歩いて来る誰かの足音だった。聞こえるか、聞こえないかの忍んだ足音だった。
小さな小さな、足を擦る音だったが、青野には階段を上がって来る者の気配のようなものが見えていた。
いつも、真夜中になると、青野の神経はぴーんと張り詰めるのだ。
ここ、数十日の習性のおかげで、青野の神経はわずかな気配でも捉えるように出来ていた。地の底から湧き起こって来る音の渦だった。
ゆっくりと広がって行った。
青野に向けて真 夜中の散歩者は歩を進めていた。誰かの影が八階の階段口のあたりに立っていた。あたりを窺っているのか、用心深く息を潜めた。三秒ほどの沈黙だった。
それからそろそろと歩き始めた。
青野にはその影が見えていたのではない。
それは、やはり、気配とでも言うべきものだった。あたりの空気が、一瞬、冴え わたり、そして、わずかに揺らいだ。
その誰とも知れぬ者は、ふいっふいっと、近ずいて来た。コンクリート槽の陰で青野は身を硬くし、身構えていた。
その時、誰かの姿がふいっと現れた。
そーと、コンクリート槽の一角から青野は顔を出し、その姿の主を確認しようとした。
いきなりにであった。あたりの静けさを破り、ぴしゃーっという音があたりに響いた。
あわてて、青野は首を引っ込めた。
相手も用心していると見え、歩様が止まった。
どうやら、とつぜんの音は、コンクリート槽

に設けられている水道の蛇口から不意に溢れた水音のいたずらのようだった。
ゆるんだ古いパッキングゴムのせいだろう。蛇口に溜まっていた水が急に吐き出されたらしい。この静けさの中だ。人を驚かせるには充分の不意の音となっていた。
沈黙は五秒で破れた。
すーと、人の影が水洗場の前を通り過ぎた。
三秒数えてから青野はコンクリート通路にと首を伸ばした。見えるところには誰の姿もなかった。這うようにし、通路へと歩む。
と、本田老人の猫背が見えた。
本田老人が立っていたのは、川村夫人の住む八〇九号室の前だった。
音も無く、本田老人はその部屋に吸い込まれた。示し合わせてあるのか、合い図もしないのに扉が開いた。
また、静けさが沈んだ。
かすかな物音が八〇九号室の扉の向こうでしたが、それも、直ぐに消えた。
鋼鉄の扉はがっちりとしていて、通路にはめったなことでは音は漏れては来なかった。
八〇九号室の郵便受けに青野の目を向けられた。何か、抗し切れないものがあった。
やはり、三ミリの覗き穴から、室内を窺っていた。空気が冷えた。
川村夫人と本田老人は黙って座っているようだった。まるで他人同士のような身のこし方だった。二メートル四方周囲は白くぼやけていた。その朧（おぼろ）な世界の中で二人は静かに合掌していた。
何かを祈っていた。
低い読経の声が漏れて来た。

八階の空に昇って来る少年の影は、この本田老人なのだろうか。
それにしても、川村夫人と何の関係があるのだろう。エレベーターの底に落ちて死んだ少年が本田老人と関係があるのは事実だが、あの時、川村夫人の名は出なかった。
何か事情があって、その時、少年は本田老人に預けられていたのかも知れない。
川村夫人が少年の母親なのだろうか。
母のいない淋しさが少年をエレベーターの遊びに誘ったのだろうか。
本田老人と川村夫人は向かい合ったまま一心に、経を念じていた。
青野は身じろぎならず、息を潜めた。
二人が何かを祈っている姿に惹（ひ）きつけられた。覗き見をしている自分を恥じ、やがてのこと、青野は郵便受けの隙間から目を離した。耐えられず、その場を外した。
背後の見えない場所から、姿かたちの見えない一人の少年が、青野の行為を見ていたかも知れない。青野は逃げ出していた。
後ろめたさがあった。
八階の空の本田老人と川村夫人、そして四階の空で抱き合っている若い二人、これらの現実的な日常の一コマ一コマは、見るべきものではなかったようだった。
自分の部屋に青野は戻る気にはなれなかった。そのまま青野は無人の屋上へと向かっていた。コンクリートの床は冷えていた。
足の先が冷え切っていた。
両の手を合わせた。暖かい息を吹きかけた。
指先が暖かくなる前に白い息は闇の空に消えた。白い息を吐きかけても指先は暖かくはなら

なかった。星空を望んだ。
星の瞬きを期待したが、空は真っ暗だった。
それでも、青野はじっと夜空を見ていた。
八階の直ぐ上がこの暗い空、った。たった一つだけ、暗夜に星が出ていた。
ちかっと光った。
その、どこの星座の星とも知れない一つの星だけを青野はいつまでも見ていた…。
エレベーターの底に落ちて死んだ女は、結局のところは事故死ということになるらしかった。誰を訪ねて来たのかも判明していなかった。
ずっと以前に、この市街地アパートに住んでいた女かも知れないし、それなりの思いが。この居所とつながった女なのかも知れなかった。
考えてみれば、この捨てられたような市街地アパートの区切られた空間は、様々な人間たちを呑み込んでは吐き出して来たのだ。
青野が住んでいる八〇二号室にだって未だに前住者の手紙が、時折りに、舞い込む。
ベッドの下を探ったら、女のヘヤーピンが出てきたこともあった。
木製ベッド上の空間にも、男と女の情事も含めて、何とはない、様々な思いが捨てられているのかも知れなかった。
青野だって、この備え付けの粗末なベッドで何人かの女を抱いた。
七〇余りの個室には、過去と今につながった行方の知れぬ男や女たちがいるに違いない。
その内の一人を、探し出そうとして警察は動き出しているのだろうか。
青野自身もそのような考え方をすれば、今度の事件とは大いに関係があるのかも知れない。
忘れてしまっていた女のことを青野は思い出

していた。記憶の糸がほぐれていた。
とつぜん、忘れていた女が訪ねて来る…そんな可能性を秘めた体験だった。
たまたまの用事で、知り合っていた女のアパートの近くを通り過ぎようとした時、青野は心が通って足を止めたことがある。
何度か、この女のアパートには通ったことがあった。それで思いが繋がったのだ。
表札は見知らぬ人の名前だった。
ただ、それだけのことだったが、この市街地アパートを訪ねて来た女にもそんな場があったのかも知れない。
今もって、事故死した女の名は明かされていなかったが、青野が勝手に話をつなげた。
青野の場合はまだこの市街地アパートに住みついて日が浅い。だから、急に、過去の昔から女が訪ねて来るなんてことはない。
だが、近い過去の中で青野は格別の思いがある女と見知っていた。
もっとも、それは忘れてしまっていた女だった。今度の事件で思い出したというべきだった。少しは関係があるのだろうかと、青野が楽しんでいるだけのことかも知れなかった。
その女と知り合ったのは夕暮れ時の喫茶店だった。雨が降っていた。
店と外を仕切る、青い彩色のほどこされたウインドウーガラスにも雨粒が降り掛かっていた。ひっそりとしていた。
青野はコーヒーが飲みたくて喫茶店に飛び込んだ。コーヒーが切れると苛々（いらいら）してくるほうだった。コーヒーを飲み終わったらもう用はなかった。さっさと席を立った。
出ようとした時、斜め向かいに座っていた女

が同じように席を立った。
外へ出でから青野は女を見た。
傘がないのに、女は一歩前に出ようとしていた。青野は声を掛けた。同じ傘に入って二人は三歩ばかり歩いた。そうなっていた。
声を掛けないと、そのまま女は雨の中へと歩き出しそうだった。
何となく女が笑った。
「どこまでですか？」
青野は生真面目に訊（き）いた。
「どこへ行くにも傘がないわ」
女は投げやりな調子で言い、ちょっと首をすくめてみせた。まだ、午後の六時過ぎだったが、二人は地下のスナックバーにもぐった。
女の方から話を切り出し、あれこれと、女が自分の身辺のことをしゃべった。
とりとめもない話だったが、地方の一都市部から、今朝方、東京にやって来たこと、同棲していた男と悶着があり、「わたし、着の身、着のまま、これじゃ、まるで、家出女よね」などとも、付け加えた。女が努めてのことか、その口説は穏やかであった。
名前も口にせず、好きな名前でないと付け加えた。それで、青野は女の名も知らない。
悶着があった男と決着をつけるために、心の整理もしたいなどとも口にした。
「抱かれることも、その解決法の一つよ」
と、大胆な文句も女は口にした。。
なんとなく、青野も同意したことで、この公団アパートに女はやって来た。
ひゅーいと、密やかな音を立てて、エレベーターは八階の、異界の空まで昇った。
八〇二号の室で二人は抱き合った。

「こんなのどうってことない。どうってことない。ね、そうよね」
そんな台詞を行為中、何回か女は口にした。
自分を罰しているようでもあり、悶着のあった相手の男を罰しているようでもあった。
「こういうことよね。でも、これでよかったのよね。わたし…」
女は自問自答もしてみせた。
女は失恋したばかりで、その辛い思いを、いっとき忘れようして、青野と付き合っていたのかも知れない。そのように看（み）て取れた。
「いいわよ。どおってことない…」
そんな同意の言葉を女は何度か吐いた。
体を硬くして女はじっと天井を見ていた。
目は閉じなかった。女は何かに耐え、何かを超えようとしてか、硬い表情のままだった。
そうやって、自分の嫌なところ、辛い分も曝（さら）け出すことで、女は自分を変えようとしているかのようだった。
挿入を受け入れた時女はわずかに、
「ああ」
と、意味不明の文句を口にし顔を歪めた。それでも、いっとき、女は夢中ぶりも示した。
それなりの歓びの声も発して、ことは終わった。が、また、元の無表情な女に戻った。
その内、女の目からつーっと、泪が溢れ出た。
青野から体を離した時、女はもう笑っていた。
ゆっくりと着衣を拾った。
バーで飲んでいた時の、一見、穏やかそうな安堵の表情に戻り、告げた。
「わたし帰るぅ」
女は怒っているのではなかった。
その語尾は甘えを含んでいた。

体に浮いた汗を、わざわざに、青野が拭いてやると、恥ずかしそうに女は笑った。
「まだ、雨が降っているよ」
引き止めようとして、青野が声を掛けた。
「いいの。泪が出ただけよかったわ。どこへ行こうか、これって、自分で決めることよね」
もう、女はベッドから立っていた。
そんな自制の文句をぽつんと残した。
女が着衣を身につけるのを、青野はベッドに寝たまま見ていたので自身はまだ裸だった。
扉のところで、女は小さく手を振った。
「また、わたし、ここへ来るかも知れない。なんか、そんな気もするわ」
半開きの扉を青野は見ていた。
女はもういなかくなっていた。
ひゅーいとエレベーターの始動音がした。
女は乗り、扉は閉まり、エレベーターは一階に向けて静かに落ちて行った。
ひゅーいという、余剰の響きを、その場に残して…。女は鏡に自分の顔を写していたのだろうか。泣き顔が鏡を見ていた。
そうに違いない。わずかな残像だけを止めて女は鏡の前からふいっと居なくなった。
青野には、四十五秒の空間に所在なく浮かんで落ちて行った女の表情が、その時、見えていた。
雨の中に走り出たまま、雨に打たれて、女は消えた。もちろん、女は名前も告げなかった。
何となく女がやって来る日を待ったこともある。もう、すっかり、そのことは忘れていた。
ある日、ふと、女が青野を訪ねて来ることだってないとは言えない。
だから、今度の事件と関係があると言うので

はない。まるで、関係のないことだ。
青野の心がそんな探りを入れているだけのことだった。死んだ女の特徴を書いた紙片が青野の部屋にはある。
が、青野はくずかごに捨てたままだった。
知ろうとしたり、たしかめようとしても、どれだけのことが分かるのだろうか。
鏡の奥を覗き込む空しさがつきまとう。三ミリの覗き穴を覗き込む時の怖さがつきまとう…。ほんとうは、何も見えはしないのに…。
窓に、小さな雨粒が当たっていた。
どうしてこんな時に雨が降るのだろうと青野は思った。しばらく、青野は窓のあたりを見ていた。ふいっと雨音が遠のいた。
エレベーターの駆動音が耳に入って来た。
今日から、また、エレベータは動くようになっていた。ひゅーいという、エレベーターの音に青野は懐かしさを感じた。
あの少年に会いたくなっていた。
青野の心は八階の空の上に浮いていた。遠くから、ふと、少年が訪ねて来そうだった。
やはり、懐かしさを感じた。
“そうだ。今夜はあの少年に会ってみよう”
と、青野は思った。
少年の心が身近なものに思えた。

いっとき、また、雨が激しくなって来た。
窓の向こうにある雨空を、青野は見ていた。
雨粒が青野の頬に当たって痛かった。
暗い空を見ると、少年がやって来る…そんな思いだったのだろうか。
白い雨しぶきが舞っていた。
窓に置いた手先が寒さに凍えた。

遠い直下の舗道が雨に打たれて白く烟（けぶ）っていた。市街地アパートの周囲はしぶきに包まれていた…。

鏡の中に存在した少年と、それを見たのかも知れない青野との関係―そのことが、青野には気になった。いや、雨の中を去って行ったあの件（くだん）の女も、脳裏にはあったのか。

雨の中に一歩を踏み出したくなっていた…。

白い雨しぶきが青野を誘っていた…。

雨の中に身を投げたい―直下の舗道に横たわる雨に打たれた死体を青野は見たような気がした。青野だけのもの思いが見た、それは〝寒い光景〟だった。開けた窓から、更々に、強い風が吹き込み、青野の頬を打った。

痛い雨の礫（つぶて）だった。

その痛さの感じに青野はふと我に返った。

急に醒め、青野は窓を閉めた。雨の音がふーと消えていた。部屋内に暖かさが戻って来た。

ここは暖かな室内だった。

だが、青野は暖かさなど感じてはいなかった。自分が今からしようとしていることに、心を向けた…。間もなく、午前二時になる。

青野は部屋から通路にと出た。コンクリートの通路は冷々としていた。

青野は雨の残像を見たような気がした。

通路には、ひそやかな雨音を立てながら、白い雨が降っている―そのように、青野には見えた。

八階の空に、截然（せつぜん）と並んだ鋼鉄の扉のあたりにも、ぼんやりとした雨曝（うばく）が、かぶさっているようだった…。

足音を立てずに、青野は通路を歩いた。

青野が吐く白い息が雨の微粒になって消えて行く。かすかに、かすかに、青野の瞼の奥を通して、雨は降っているのだった。
その時、ひゅーいとエレベーターの始動音がした。目をやった標示板の数字は一階を離れていた。はっとして、青野は一歩前に出た。
エレベーターの扉に近づいた。
あの少年がやって来るのだろうか。
誰かが八階の空を目指して昇って来る…。少年は青野の顔を見て笑うだろうか。
可哀そうな少年なのだ。
この市街地に住みついたら、それこそ、遊ぶ場所だってないのだ。
一歩、外に出たら車が巡っている。
十字路になった交差点を渡るのは大人でも怖い。市街地アパートの周囲は、ぐるぐる回りの車の輪に取り囲まれていた。
この市街地アパートには、今も、幾人かの子供たちが住んでいた。子供たちは階段を駈け上がり、そして、また、階段を降りる。
用意ドンで、階段を走り場に変える。
子供たちの誰かはエレベーターを遊び場にしてしまう。ボタンを押す遊びだ。
走るのと、エレベーター の駆動はどちらが早いか。そんな遊びも加わって、のろのろエレベーターはカケッコに 参加させられてしまうのだ。青野も各階段ごとに停止する子供たちのの、いたずら遊びに出会ったことがあった。
各階ごとに、子供たちが立っていた。
みんな笑っている。
だが、青野は怒れなかった。
笑うともなくその場を取り繕った。
この市街地アパートでは、エレベーターだっ

て、子供たちの遊び場なのだ。
真夜中の少年も、エレベーターがたった一つの遊び場だったのではないのか。
だから、何年か前の事故で、誤って、少年は風洞直下の奈落の底に落ちたのだ…。
そうなのに違いない。
修理中のエレベーターの暗い底、そこが今は少年の居場所なのだろうか。エレベーターに取り憑かれた一人の少年がいても不思議ではない。だから、少年は一人で空を昇って来るのだ。
青野には少年の遊びの様が看（み）て取れるように分かった。
真夜中の午前二時という時間、それは少年の死の遊びための時間なのだろうか。いや、死んだ少年の夢の遊びを乗せて、エレベーターは暗い夜空へと昇って来るに違いなかった。
青野が八階の空の上に浮かべた少年は、青野の少年時代の面影をどこかに残しているに違いない。青野は少年に思いを馳（は）せた…。
その時、エレベーターは四階で停止したようだった。止まるはずはないと思った。
が、エレベーターは四階で止まった。
あの甲（かん）高い靴音が、青野の充ち足りた緊張感を踏みにじっていた。
ハイヒールの高い踵（きびす）の音が、八階の空の上にまで突き立っていた。
とっさのことで、青野は判断力を欠いていた。あの、真夜中になると、冴えわたる神通力が失われていた。現実というものに、ついついに、引き戻されていた。
もちろん、それが、みつ子の靴音だったかどうか。みつ子のいつもの靴音、あの甲高い響きとは同じものだったが…。

青野は階下には降りて行かなかった。
見るべきではないものを青野は見てしまったのだ。誰かのある日を、気まぐれに、盗み見たそれは報いなのだろうか。
みつ子の白い乳房は、もう、あの新鮮な驚きの情を失ってしまっていた。
みつ子から言えば、元のままの新しさなのだろう。別に、汚されたというものでもない。
四階の空に誰かが、帰り着き、そして、その気配は、やがてのこと、静けさの中に呑み込まれた。青野は内心ほっとしていた。
心を踏みにじる音だと、裏切られた思いもあり、みつ子の存在を否定しにかかった。
だが、もう、心に突き立つ音は途切れていた。今は、静かだった。青野の心は和んだ。
もう、どうでもいいことに思われた。
みつ子だって他に好きな男がいたっていい。
許したというのではない。しょうがないのだ。ふと知り合った仲、それだけのことだろう。
どれだけのことが分かり合えたかと言えば、何も分かってはいないのだ。
それだけのことだ。見えたとしても、わずか三ミリ幅しかない視界のことだ。
一体、何が見えると言うのだろう。
他人と他人同士、二つの違った心、いや、まるで違った二つの心とでも言うべきか。
たとえ、みつ子と言う女を所有したところで、すべてでなんかない。
極く極く一部で、いつかは、やはり、裏切られるだけのことなるのかも知れない。
誰しも、人の心の奥の奥までも、覗き込むことなんて出来はしないのだー。
たとえば、冷たい空に吐き出す白い息のよう

にだ。ふいっと吐き出して、ふいっと消えてしまう。あるいは、あの壊れた鏡のようにだ。
ふいっと写し出して、ふいっと消える。
残像のような空しさだけが、人間同士の付き合いには、きっと、ついて回るのだ。
だとしたら、人のことなど、何も知らないほうがいい。忘れてしまった部分、忘れようとしている部分、そして、知られたくない部分…それに、壊れてしまった部分もだ。
この真夜中、青野にとってのたった一人の知り合いは…あの、真夜中の少年しかいなかった。親しみの思いさえ、今は湧いているから不思議だった。
エレベーターは可哀そうな遊び場だ。
無邪気なこころで、つまりは、大人の童心を持って、青野は一日中、エレベーターを昇ったり、降りたりしていたいと思った。
それが、わずか二メートル四方の小さな檻（おり）で、薄剥げた青色塗料の傷跡があって、鋼鉄の冷たさを持っていたとしてもだ。
それしかない。
そこにしか、今は、青野の遊び心を充たしてくれる場所はなかった。
毎日、定刻に家を出て、定刻に仕事を始め、そして、いつものように家に帰る。
その場所が八階の場所だと言うのもいかにも、もの悲しいではないか。
四十五秒の空間を昇る空しさ、時に道草をしたとしても、プラス七秒、そんな遊び心を加えても、やはり、空しい。
だが、結局、エレベーターには乗らなければならないし、青野の帰り着くところは、やはり、八〇二号室でしかなかった。

だとしたら、青野だって、エレベーターを真夜中の遊び場にしてもいいはずだった。
雨に濡れた少年は…寒そうに肩をすぼめているのだろうか。
青野が笑い掛けたら、はにかみながら、少年は笑いを返してくれるだろうか。
だが…もう、間もなく、この市街地アパートは取り壊される。
そのように話は進んでいるのだった。
少年のあどけない笑いも、あと半年も経てばここからは消えてなくなり、そして、少年のたった一つの遊び場も、この世から消え失せてしまう。いつか、壊れていた鏡のように、コンクリート塊も、壊れて散るのだった。
そして少年は…。青野は黯然（あんぜん）たる思いに取り憑かれた。
哀れなこの結末話に心が震えた。
一人の少年の死―あらためて、この理不尽なことの成り行きに青野は心を痛めた。
その時…また、エレベーターの始動音がした。ひゅーいというもの悲しい音が発せられた。
エレベーターは停止していた四階の位置から一階に向かっていた。
地階の底には、深い穴があった。その暗闇には、少年が住みついていて…青野はそのように考えた。エレベーターは、地階までは通じなかったが、少年は一階まで歩いて行き、そして、一階でエレベーターの押しボタンを押したのかも知れなかった。残り少ない真夜中の遊びを、今夜も楽しむために…。
今、少年は心震わせているに違いない。
つぶらな瞳をした少年は一階のエレベーターの踊り場に立っている。そして、エレベーター

は静かに、一階にと降り立った。
少年が開閉ボタンを押す。
そして、エレベーターは上階を目指した。
ひゅーいと音がし、エレベーターは八階の空を目指した…。
少年の歌声を、青野は聞いたような気がした。青野は標示板を見ていた。
少年と会うべきだろうか。少年に違いなかった。あどけない笑みを口元に浮かべた可愛い顔をした少年のはずだった…。
だが、青野は八階のエレベーターの踊り場から、身を引いた。背を向けた。
見てはならない。見るべきではない。
壊してはならない。少年が驚きのために顔を歪めるかも知れない。
青野の心の中で、はにかみながら、あの少年は、いつまでも笑っていて欲しい。
だから見てはならない。
自室の八〇二号室に向けて、一歩、二歩と青野は歩き始めた。ひゅーいというもの静かな空中飛行の音を、青野は背後に聞いていた…。

（了）